

実践報告

社会人基礎力育成のための「マードーミステリー」の可能性に関する予備的調査 Pilot study on the possibility of “Murder Mystery” for the development of fundamental skills of a working adult

大 矢 薫

新潟リハビリテーション大学 医療学部 リハビリテーション学科 リハビリテーション心理学専攻

〔受付：令和4（2022）年10月7日〕

〔受理：令和4（2022）年11月21日〕

キーワード：社会人基礎力，マードーミステリー，柔軟性

問題と目的

近年，18歳人口の減少により大学全入時代と言われる，進路多様校（多様な進路希望を持つ生徒が在籍する高校）¹⁾から大学に進学する者が多くなってきている。そのため，学習，心理，対人関係，集団行動などに課題を抱え，社会に出て働くことがまだ難しく，社会に出るための成長を目指して大学に進学する大学生が存在している。そのような中，2006年，経済産業省は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として社会人基礎力を提唱した²⁾。社会人基礎力とは「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」の3つの能力に分かれており，「前に踏み出す力」は「主体性（物事に進んで取り組む力）」，「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」，「実行力（目的を設定し確実に行動する力）」と

いう3つの能力要素から構成され，「考え抜く力」は「課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）」，「計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）」，「創造力（新しい価値を生み出す力）」という3つの能力要素から構成され，「チームで働く力」は「発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）」，「傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）」，「柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）」，「状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）」，「規律性（社会のルールや人との約束を守る力）」，「ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）」という6つの能力要素から構成されている。これらのことから，社会に出て働くことに対する課題を抱えている大学生の社会人基礎力を育成し，社会で活躍できる人材として輩出することが大学の1つの使命といえる。

* Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学 医療学部 リハビリテーション学科 リハビリテーション心理学専攻

〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16

Tel : 0254-56-8292

Fax : 0254-56-8291

E-mail : ohya@nur.ac.jp

大学生を対象とした社会人基礎力を育成する先行研究は数多く存在し、インターンシップに参加することで「前に踏み出す力」と「考え抜く力」が有意に伸長すること³⁾やキャンプ実習に参加することで「規律性」を除く11の要素が有意に伸長すること⁴⁾などが示されている。その一方で、インターンシップやキャンプは、普段過ごす生活場面とは違う新しい環境での生活を求められることからストレスになる⁵⁾と考えられる。そのため、開始前や開始直後の参加者の心理的負荷は高いと推測され、心理、対人関係、集団行動などに課題を抱えている大学生にとってはハードルが高いと考えられる。そこで注目したのが「マダーミステリー」というコミュニケーションゲームである。マダーミステリー⁶⁾とは、殺人などの事件が起きたシナリオが用意され、複数の参加者たちが物語の登場人物となって犯人を探し出す（犯人役の人には逃げ切る）事を目的として会話をしながら進めていくゲームである。それぞれの役柄の背景や事件当日の行動などがシナリオとして用意されており、まさに参加者自身が推理小説の世界に入ったような体験ができる。マダーミステリーの具体的な流れ⁷⁾としては、まず参加者たちは自分が演じる役柄の設定書を受け取り、読み込む。その後、事件内容、登場人物、所持品などに関連する情報カードを入手したり、他の参加者と会話をし情報交換をすることで、犯人が誰なのかを考えていく。そして最後に、参加者が一堂に会して最終的な話し合いを行い、犯人が誰なのか、結論を導く。その後、エンディングとなるが、結論によってエンディングの内容が変わるように作られている。犯人を特定する以外にも、役柄それぞれが目的を持っており、最終的にその目的が達成できたかどうかを確認していくシナリオも存在する。エンディング後は、参加者全員で感想を共有し、ゲーム中には分からなかった部分を解明していく。このようにマダーミステリーは一度体験するとすべての謎が解けてしまうので、シナリオ1つにつき一生に一度しかプレイできないという特徴もある。マダーミステリーは新しい環境に行くことなく、普段生活している場所（例えば、大学の教室など）でゲーム感覚で楽しめ、かつ参加者同士の積極的な会話や行動が重要になるため、インターンシップやキャンプに比べて心理的負荷が少なく、社会人基礎力を育成することができるのではないだろうか。

そこで本研究では、マダーミステリーを体験したことがある大学生に対して、社会人基礎力に関する質問紙調査を行い、マダーミステリーが社会人基礎力

の育成につながるかどうかを検討することを目的とする。

方法

1. 調査時期

2022年6月～7月。

2. 調査参加者

中部地方にある医療系大学であるA大学の3～4年生10名（男性8名、女性2名、年齢20～23歳）が調査に参加した。この10名はマダーミステリーを2021年10月～2022年6月までの間に2～3回、実施した経験を有する。本研究でマダーミステリーを選択した理由としては、対人関係ゲームが対人不安の拮抗制止や人間関係形成の促進効果を示した先行研究⁸⁾を参考に、緊張度や不安度の高い大学生にとってはゲームという仮想空間での相互交流が実際の社会における疑似体験となり、コミュニケーション力、さらには社会人基礎力を高める可能性があると考えたからである。

3. 調査方法と調査内容

協力を得られた参加者に質問紙を配布し、参加者が回答後、回収した（10名中1名は、別日に質問紙を渡し、1週間後に回収した）。実施時間は5分程度であった。

質問紙の内容は経済産業省の社会人基礎力の説明²⁾をそのまま利用して筆者が作成し、3つの内容から構成されている。1つ目（表1）は、マダーミステリーに2回参加することで、社会人基礎力の12の能力要素である「主体性（物事に進んで取り組む力）」、「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」、「実行力（目的を設定し確実に行動する力）」、「課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）」、「計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）」、「創造力（新しい価値を生み出す力）」、「発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）」、「傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）」、「柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）」、「状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）」、「規律性（社会のルールや人との約束を守る力）」、「ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）」が向上するかどうかを尋ねた。選択肢は、精神的健康度のスクリーニングとして広く利用されている心理尺度K6⁹⁾の選択肢を参考に、「向上しない（0点）」、「すこし向上する（1点）」、「だいぶ向上する（2点）」、「す

ごく向上する（3点）」の4件法とした。2つ目は、マörderミステリーに参加して自分の中で変化したことについて自由記述で回答を求めた。3つ目は、マörderミステリーに参加してみた感想について自由記述で回答を求めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、新潟リハビリテーション大学の倫理委員会の承認（承認番号216）を得て行われた。調査対象者には文書と口頭で調査の趣旨および、対象者の自由意志に基づく調査であること、調査結果は本調査の目的以外では使用しないこと、無記名であり、個人が特定されることがないことを説明し、質問紙の提出をもって同意が得られたこととした。

結果

分析対象者は、参加者10名であった（有効回答率：100%）。マörderミステリーに2回参加することで、向上すると考えられる社会人基礎力の12の能力要素の平均値を高得点順に並べると、「柔軟性（2.1点）」、「傾聴力（2.0点）」、「実行力（1.9点）」、「発信力（1.9点）」、「課題発見力（1.8点）」、「情況把握力（1.8点）」、「主体性（1.7点）」、「計画力（1.7点）」、「働きかけ力（1.6点）」、「規律性（1.2点）」、「創造力（1.1点）」、「ストレスコントロール力（0.6点）」であった（図1）。

考察

本研究は、マörderミステリーを体験したことがある大学生に対して、社会人基礎力に関する質問紙調査

表1 社会人基礎力の12の能力要素がマörderミステリーに参加することで向上するかどうかを尋ねた質問項目
質問1. マörderミステリーに2回参加することで、以下の12の能力要素が向上するかどうか、
あてはまる数字に○をつけてください。

	向上しない	すこし 向上する	だいぶ 向上する	すごく 向上する
主体性：物事に進んで取り組む力	○	1	2	3
働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力	○	1	2	3
実行力：目的を設定し確実に行動する力	○	1	2	3
課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力	○	1	2	3
計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	○	1	2	3
創造力：新しい価値を生み出す力	○	1	2	3
発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力	○	1	2	3
傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力	○	1	2	3
柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力	○	1	2	3
情況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	○	1	2	3
規律性：社会のルールや人との約束を守る力	○	1	2	3
ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力	○	1	2	3

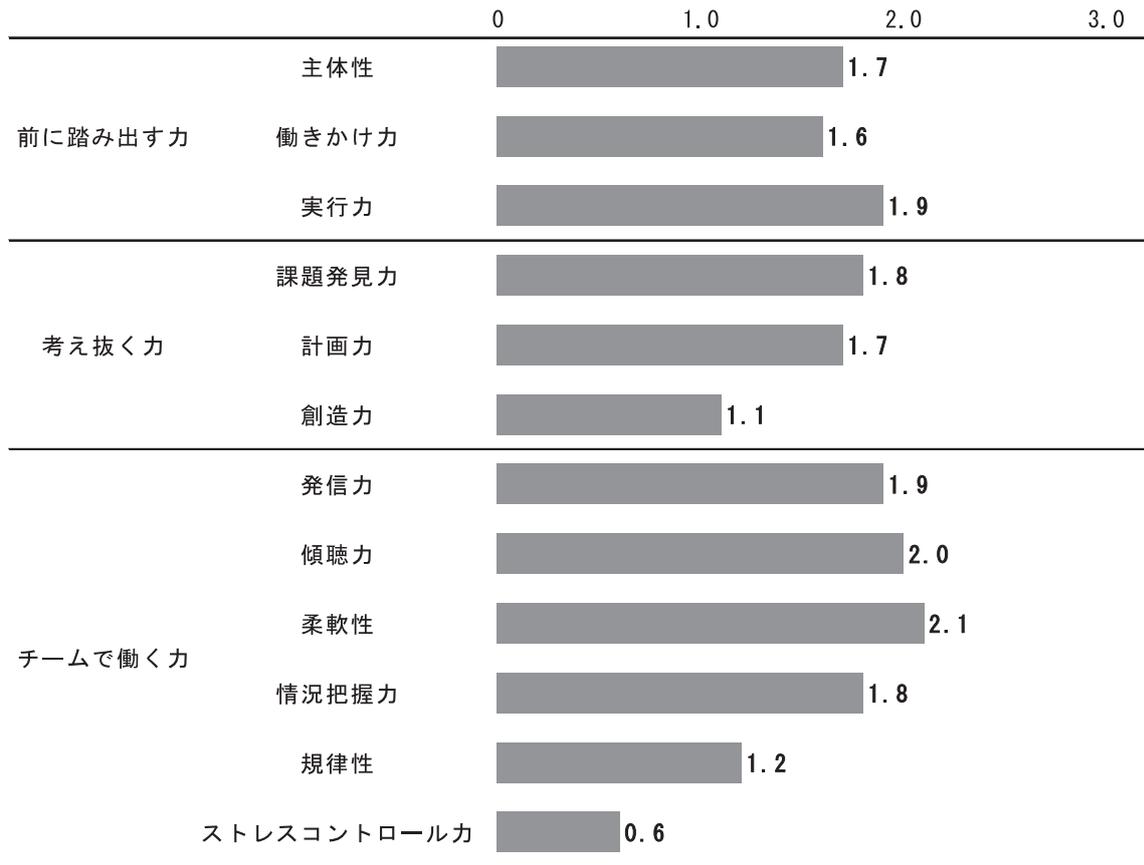


図1 マードーミステリーに参加することで向上すると予測される社会人基礎力の12の能力要素の平均値（得点範囲は0－3点）

を行い、マードーミステリーが社会人基礎力の育成につながるかどうかを検討することを目的としている。

マードーミステリー経験者がマードーミステリーに参加することで向上すると考える社会人基礎力の中で1番高い力は「柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）」であった。マードーミステリー参加者は最初に配布される自分の役柄についての設定書を読むことで、まず自分がどのような人物なのか、登場人物の中でどのような役割が求められているのかなどを理解し、キャラクターの構築を行う。しかし、その後、ゲーム展開の中で手に入れた情報カードの内容や他の参加者との会話を受けて、それまでの自分の考えや行動を転換するなど臨機応変に対応することを求められる場合もあるため、意見の違いや立場の違いを理解する柔軟性はマードーミステリーを進めていく中で重要な要素となると考えられる。

2番目は「傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）」であった。マードーミステリーで犯人を特定するためや自分の役柄の目的を達成するために重要な要素は他の参加者との会話である。参加者それぞれが重要な情

報を持っているため、お互いに相手の話をじっくり聴く必要がある。この会話の仕方によっては、犯人ではない人を冤罪で捕まえてしまったり、自分の役柄の目的が達成できなかったりする。マードーミステリーは展開によって違うエンディングが用意されているため、参加者たちが一番良いと思うエンディングを迎えるためには、傾聴力を発揮して、正確な情報を集めながら会話を展開していかれるかどうかが鍵となる。

3番目は同得点で「実行力（目的を設定し確実に行動する力）」と「発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）」であった。本研究の自由記述の部分で「当初は自分から話しかけることに抵抗があったが、自分から行動しなければ得られない情報が多くあることに気づき、自主的に行動することが徐々にできた。」と記載した参加者がいたように、マードーミステリーは自分で考えて行動することが必要となるので、「実行力」が重要であるといえる。また、「何をどう伝えたらいいか言葉選びが向上したと考える。」と記載した参加者もおり、自分の持っている情報をどのように発信して、周りに伝えていくのかもゲームの展開を左右

するため、「発信力」も重要であるといえる。

一方で、1番低かったのは「ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)」であった。マörderミステリーは楽しみながら参加するコミュニケーションゲームであり、インターンシップやキャンプのように、普段過ごす生活場面とは違う新しい環境での生活を求められることから生じるストレスに立ち向かって乗り越えるというものではないので、ストレスコントロール力の向上には効果が薄いと考えられる。ただ、マörderミステリーという名前の通り、殺人がテーマ(誰も死なない内容のゲームもある)になるので、殺人というテーマ自体にストレスを感じる人は想定されるため、参加者の選定には注意を要するといえる。

以上のように、マörderミステリーに参加することは社会人基礎力を向上させる可能性があることが示唆されたが、本研究の限界としては、本研究はあくまでマörderミステリーが社会人基礎力の育成につながるかどうかを検討しただけであって、実際に調査参加者の社会人基礎力の程度を測定し、マörderミステリーの効果を実証的に明らかにしたわけではない。今後は既存の社会人基礎力測定尺度¹⁰⁾などといった社会人基礎力を測定するツールをマörderミステリーの前後に実施し、本研究で得られた知見を実証的に明らかにする必要がある。また、本研究ではマörderミステリーを経験したことがある大学生を対象に調査を行ったが、マörderミステリーは殺人などの事件が起きたシナリオを使用するため、抵抗感がある人もいであろう。そのため、実証的な研究をする際は、トラウマなど辛い出来事を思い出させることがないように調査参加者の選定を慎重に行い、事前に調査参加者のマörderミステリーに対する抵抗感について把握する必要がある。

引用文献

- 1) 千葉勝吾：進路多様校の研究：進路選択の成就と蹉跎の構造分析，東洋大学 博士論文，2008.
- 2) 経済産業省：社会人基礎力 (Accessed 2022-4-28). <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
- 3) 中井咲貴子：社会人基礎力の段階的伸長に関する実証分析. 佛敎大学大学院紀要 教育学研究科篇, 49 : 35-45, 2021.
- 4) 林 直也, 佐藤博信, 溝畑 潤：キャンプ実習が大学生のコミュニケーションスキル及び社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究. Human Welfare, 12 (1) : 103-118, 2020.
- 5) 山口直己, 足立はるゑ, 城 憲秀, 他：高校から大学への移行に関する円滑な適応を目指して－保健看護学科1年生が認知するストレス内容とコーピング－, 生命健康科学研究所紀要, 9 : 35-40, 2013.
- 6) マörderミステリー専門店 Rabbithole:マörderミステリーとは? (Accessed 2022-4-28). <https://rabbithole.jp/>
- 7) グラフィック社編集部：マörderミステリーって何?, グラフィック社編集部(編), マörderミステリー エントリーガイドブック, グラフィック社, 東京, 2020, 4-5.
- 8) 中村恵子, 田上不二夫：うつ症状を伴う不登校生徒に対する別室登校での学校環境調整と対人関係ゲームの効果, カウンセリング研究, 51 (2) : 114-124, 2018.
- 9) 古川壽亮, 大野裕, 宇田英典, 他：厚生労働科学研究費補助金厚生労働科学特別研究事業「心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究」平成14年度分担報告書, 2003.
- 10) 大対香奈子, 堀田美保, 本岡寛子, 他：大学生の社会人基礎力測定尺度の開発, 近畿大学総合社会学部紀要, 7 (1) : 51-59, 2018.